

報道によると、厚生労働省は、「GHB」「4-MTA」を新たに麻薬に指定することを決め、近く麻薬向精神薬取締法の政令を改正します。

以下は、日本中毒情報センターが医療関係者向け日刊紙「Japan Medicine」(株式会社じほう発行)に連載中の“最近の中毒と医療”に掲載した「GHB」(2001年7月16日No.286号)についての記事です。

## 最近の中毒と医療(25)

### ===== その他 GHB =====

GHB(gamma hydroxybutyric acid)は本来、麻酔薬として開発されたが、睡眠薬、レクリエーションドラッグ等として使用されるようになった。アメリカでは乱用による死亡例を含む健康被害が多数報告されたため、1990年に製造販売が禁止された。(財)日本中毒情報センターへのGHB類に関する問い合わせは1999年3件、2000年4件とまだ少数ではあるが、インターネット上の輸入代行サイトでは現在も数多く紹介され容易に入手できる状況にある。

症例：32歳、男性

自分で購入したGHBを、快楽目的に、通常量の数回分をまとめて摂取した。摂取2時間後、友人が意識消失していると救急隊に連絡し、2.5時間後、病院に搬入された。受診時、昏睡状態で、徐脈、呼吸困難、嘔吐があり縮腫が認められ、対光反射もなく、顔面蒼白であった。胃洗浄が施行され、その後、とくに治療を必要とせず、約12時間後にはすべての症状が治まり、予後も良好であった。

GHBの他に、体内でGHBに代謝されるGBL(gamma butyrolactone)や1,4-butanediolもインターネット等を通じて入手できる状況にある。アセトン非含有マニキュア除去剤やシアノアクリレート系接着剤の中にGBLを含有している製品もある。

GHBは、神経伝達物質であるGABAやグルタミン酸と構造が類似しており、中枢神経抑制作用と脊髄に直接作用すると考えられる筋弛緩作用等を有する。中枢神経抑制作用は用量依存的で、静注時10mg/kgで筋緊張低下、20～30mg/kgで傾眠、多幸感、50～70mg/kgで昏睡、呼吸緩徐、徐脈、血圧低下、嘔気・嘔吐等がみられる。ただし、GHBの経口摂取に対する反応は患者によって、また同一の人でも多彩な様相を呈する場合がある。症状発現は経口で10～30分後、昏睡は1～2時間続くが、完全な回復まで8時間以内とされている。アルコールや他の向精神薬と併用した場合、症状が重篤化することがある。吸収が早いため、胃洗浄は大量摂取で摂取後30分以内であれば考慮する。特異的な解毒剤はなく、重症例では呼吸・循環管理が必要となる。本邦でもGHBを100g摂取し、死亡後発見された例が報告されており、呼吸および循環不全から肺水腫を起こし、死亡したと推定されている。